

敗戦後の佐多稲子についての一考察：「虚偽」を視点に

矢澤, 美佐紀 / ヤザワ, ミサキ / YAZAWA, Misaki

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

63

(開始ページ / Start Page)

54

(終了ページ / End Page)

65

(発行年 / Year)

2001-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020149>

敗戦後の佐多稲子についての一考察

——「虚偽」を視点に——

矢澤 美佐紀

1

佐多が敗戦後自らの「戦争責任」を自覚したのは、昭和二十二年十二月に新日本文学会発足の発起人メンバーから除外されるという事実を中野重治から言い渡された時だった。その時の衝撃は、昭和三十一年九月の『新日本文学』に発表された「自分について」というエッセイにおいて、率直に回想されている。^{注1}ここで佐多は、「戦争責任」について最も明確な自己分析を行っていると言えよう。

終戦になって、はじめに私はいささかの戸惑いも感じなかった。開放感と今後の占領軍に対する身構えを持っただけであつた。それほど私は、自分の戦争中の行為に恥を感じていなかったのである。これはいったいどういうことなのだろう。だから私は、新日本文学会の創設に私に加えられないということと言ひ渡されたとき、終日

寝込んだ。疑問と差恥の中でのた打ち、自分を責めた。(傍線・引用者)

以下「疑問と差恥」の内実が整然と語り始められるのだが、ともかくも佐多は敗戦後ここを基点として出発し、「戦争責任」を一生背負うことになったのである。昭和二十三年六月『人間』^{注2}に発表された「虚偽」は、この時の状況を背景にして、佐多が「疑問と差恥」を未整理の状態で抱えたまま、かつての仲間達による厳しい批判に答えようとしたことが直接的なモチーフとなつており、それまで詳細な記述を回避してきた「戦地慰問」体験と真正面から向き合い、小説という領域で「戦争責任問題」をテーマとして初めて深く中心化した作品だつたと言える。本稿では、従来独立したかたちで論じられることがなかった「虚偽」の言説空間と、それが生まれた周辺の事情を一つの機軸にして、敗戦後の批判の中で一旦は内閉されかけた佐多の言表行為が外に向かつていかに開かれていったのか、その端緒を考察

してみたいと思う。

「虚偽」が発表された昭和二十三年とは、どのような年だったのだろうか。少し前の昭和二十年頃より出版業界は空前の活況ぶりを呈し、二十三年頃には知識人、特に作家の共産党入党が相次いだ。これらはまさしく人々の「言論・表現の自由」に対する渴望を顕著に示す現象だったと言える。しかしそうした表面的「自由」の裏側では、翌二十四年の下山・三鷹・松川事件に象徴される、民主化政策の引き締めという重苦しい空気が再び不気味に漂い始めてもいた。^{注3} 佐多は、このような状況の中で必然的に起こった「戦争責任問題」をつきつけられつつも、戦中とは質を異にする困難な時代に抗して旺盛な活動を開始している。

佐多の生活情報を全集年譜で追うと、婦人民主クラブや新日本文学会を足場に直接行動の烈しさに加え、執筆活動のこじれた驚異的な旺盛さには驚かされるのだが、^{注4} この頃の佐多の心持ちは、昭和二十三年四月の『女性改造』に発表された「旅日記」での、視点人物である「私」の暗い有り様に見ることができらるだろう。そこでは、講演会といういわば「公の場」で、「戦争協力」の罪を刻印された自己の「恥」をさらすことにあえて耐え、少しずつ歩みを進めようとする「私」の心理が、曲折した重苦しい口調によって語られている。

ここで留意されねばならないのは、たどたどしさや〈迂回〉といった文体自体が引き起こす作品世界の暗鬱さや文脈のわからなさや比して、語られる実践内容自体がストレートでわかりやすく行動力に満ちた運動として提示される点である。これは

実践内容に限ったことではなく、それと直接的にリンクする評論やエッセイの明快さにも通じており、当時の佐多の揺らぎの内部を語る一つの徴と言えるだろう。この点に関しては小林裕子が、〈恥〉の意識にまみれ、自らの「戦争責任」を厳しく抱え込んだ小説の暗さに比べ、ファシズムの復活を労働者の立場から憂慮した評論・エッセイは、自他共に奮い立たせるかのような意欲によってある種の明るさに満ちていたと指摘している。^{注6} 小説の中でも、とりわけ直接「戦争責任」に抵触せざるをえない白伝的小説の暗さは突出している。「戦争責任」という痛みを自ら引き受けることの苦渋ともがきは、「戦争協力」を犯すに至った自己の自我形成過程を辿るといふ、探索的側面の強い白伝的小説を書く行為そのものに錯綜する精神的営為の痕跡として滲出しており、語り口調も自ずと曲折せざるをえなかった。そして、小説「虚偽」もかなりわかりにくい。そのわからなさは、「虚偽」以前「戦争責任」に間接的にふれた「女作者」^{注6} や「道」^{注7}（『私の東京地図』）、また「虚偽」以後の「泡沫の記録」^{注8} 等にも通底している。その理由を作品作成上の方法に求めるとすると、特に次の二つの問題が挙げられるだろう。まず一つには、戦前・戦中の回想場面から、「戦争責任」を追求される現在へと物語の時間が不意に切り替えられることからくる不明性という、作品構成上の〈不連続〉という問題がある。そこには批判に直面する執筆時の「私」が作品世界に唐突に参入したことの、時間的・心理的飛躍という読者の戸惑いや異和感が必ずや召還されてしまう。二つ目は、「戦争協力」の核心部分を巡る情報の〈空白〉や〈迂回〉といった、語り口調の〈屈折〉という文体の問題が

存在する。このようなフォームからは、当然の成り行きとしてある作用が引き起こされる。同じ素材を扱った評論的エッセイの、項目を立てて論理的に進める前向きな色調に比べ、小説の作品世界は多様な意識が交錯し、時に語り手の意識の混濁さえ感じるほどの混沌とした暗さを深部に沈めることになるのである。

小説には多分、評論的エッセイの整合性を前景化したステートメント的な筋立てからはいっしょかみ出さざるをえない、「戦争協力」という傷口をめぐる語り手の本音が見え隠れしている。もはや思い出したくはないであろう当時を回想するという、うねうねとした平坦ではない心理ドラマの中には、戦時中隠蔽されていた記憶の再定義や改編が、そこに散りばめられているはずである。評論的言説では決して表現され得ない、幾重にも折り重なった心理の壁々や、整理されぬままに〈屈折〉した形でまとまり悪く投げ出された語り手の揺らぎという二次的な物語を、我々は意識的に受け止めなくてはなるまい。自然作品の完成度はそう高いとは言いが、しかしそこには、佐多にとつての真実—あるいは言い分と言った方が適切かもしれない—があり、一人の作家が「戦争責任」といかにして向き合ったかということの証左と一筋縄ではゆかぬ困難さとが表出されているはずである。

佐多の語りつつ語らぬという〈屈折〉した手法の中で、実は期せずして語られた物語を読み解く作業が求められよう。作家が、小説の情報欠損を補完するため意図的に読者に用意した「自分について」というわかりやすい評論的言辭の整合性は、「虚偽」

というテキストを前にして一度は脇に押しやらねばなるまい。

2

「南方」への戦地慰問を回想した「虚偽」の作品内時間は、昭和十七年と推察される。長谷川啓によると、佐多はこの年の十月三十一日、当時「南方」と称された日本の占領下にある東南アジアの国々へ向けて戦地慰問に出発している。これは「大本営陸軍報道部企画」によるものであり、肩書きは「無給の軍属」であったという^{注9}。一行のメンバーは、後に「軍政」^{注10}を著した中央公論社の黒田俊秀などの出版社・新聞社の編集長や編集部員、当時時めく女性作家たちであった。陸軍省報道部配布の極秘資料^{注11}によると、佐多の他、中里恒子（実際には参加していない）、林芙美子、横山美智子、宇野千代、真杉静枝、水木洋子、川上喜久子、阿部艶子といった顔ぶれであったことがわかる。また、その文面から読み取れる表向きの行動は、当然のことながら軍指導部によって細部に涉り規律化されていたことが窺える。

戦時中の女性の、被害者としてのみならず加害者としての側面をも見据え、隠蔽または忘却されてきた体験を掘り起こそうという動きは近年活発になってきているが^{注12}、佐多や他の女性作家たちもまた政府によるうわべの女性能力起用の政策に乗せられて戦争協力へと傾斜していった。この間の経緯については、長谷川啓の研究に詳しい^{注13}。あるいはまた、櫻本富雄の『文化人たちの大東亜戦争 PK部隊が行く』^{注14}によると、軍が女性作家を「女

流」として男性作家とは差別していたことや、昭和十八年八月十日発行の『文藝年鑑』の「軍報道部員として活躍せる作家氏名」欄からは、数人の男性文化人を含めた女性作家全ての名前が漏れていたことなどがわかる。女性の能力を一方では利用するが、しかし公的には評価しないという、時の権力の巧妙な手法が透けて見えよう。ここに戦時体制下の佐多を含む多くの女性作家の、存在自体が抱える矛盾の実相が象徴されている。

「虚偽」では、慰問先で女性作家を国家的論理の代行者として表向き活躍させつつ、その裏で日常的に「女房扱い」する大衆雑誌の編集長・Hの言動に、当時の男性原理の本質が容易に了解される。戦時下では、彼女たちの能力や理想は二重に屈折した形で国家権力に回収されてしまったのである。

当時の日本軍にとって、昭和十二年七月の盧溝橋事件に始まる日中戦争のゆきづまりを打開するため、東南アジア進出により日本国力の維持・増強を図ることが緊急の課題だった。そして昭和十六年十二月八日、日本軍は真珠湾攻撃の一時間前に、フィリピン・香港・マレー半島方面へも攻撃を開始したのである。これは、「大東亜共栄圏」建設という名の^{注15}に敢行された侵略・占領・支配に向けての具体的な第一歩だった。以来日本国内には、「南方熱」という一大ブームが吹き荒れることになる。具体的には、南方の産業・経済・文化・風俗・気候等に関する書物が大量に出版されたことからその一端が窺える。^{注16}「虚偽」に登場する様々な民間人たちのように、当時の庶民の多くが「南方」には何かいいことがあるという「甘いことを夢見て」いたに違いない。彼らは、内地の苦しい生活からかけ離れた異空間

として、「南方」に豊かさや明るさを思い描いたことだろう。

作家の南方慰問はこうした文脈の中で遂行されたのであり、佐多もまた、出発から昭和十八年四月四日の祖母タカの訃報に^{注17}接し、五月上旬から中旬にかけて帰国するまでの半年以上の間、そしてその後も、「各作家の現地に於ける日常の見聞を語りつつその間おのづから我が南方建設の着々たる進歩状況と原住民の協力ぶりを感知せしめ、敵国民をして密かに我が実力を畏怖するの念を懐かしめることを主眼」とする^{注18}『新生南方記』、南方讚美・南方政策讚美の文章を多く世に送った。^{注19}佐多は、戦時中昭和十六年から四回の戦地慰問を行ったが、そのうち初めの三回までが中国、最後が南方行きであった。^{注20}

「虚偽」では、語り手は作家である主人公・年枝が終始「意識的な虚偽」という「隠れ蓑」を着た面従腹背のかたちで行動したと主張するが、当時の佐多の報告文等での身振りを見る限り今日我々がそう受け取るのはかなり難しいと言える。この点を例えば北川秋雄は、偽装ではなく完全な転向と見ている。^{注21}ただしここでもやはり、戦争協力的な言説をめぐって評論的言説と小説言語との間に微妙な差異が存在していたことは、谷口絹枝の戦中の佐多の通俗的小説についての分析からも判断することができ、^{注22}「転向」の詳細な経過や決定的時期の特定については、今後の課題として残されていると言えよう。佐多の主張通り、はたして本当に面従腹背であったのかどうか、当時の読者受容の内実を完全に掘り起こしそれを実証することは極めて困難である。しかし仮に偽装だったにしろ、それを真正面から受容した聴衆がいたことは地方講演の盛況ぶりを見ても明らかで、そ

ここにこそ佐多の責任の所在があると言えるだろう。さてここではまず、こうした佐多の当時の現実と、「虚偽」執筆時の語り手の現実認識とのズレという、作品外部（作家・時代的コンテクスト）から炙り出される二重性の問題が浮かび上がってくる。

次に、年枝の「隠れ蓑」という自覚的意識と、軍から強いいられた実際行動との乖離という、作品内部の語りのスタイルとしての二重性が存在する。また、この作品は全五章からなり、前半の五分の四を慰問回想記が占め、年枝が「戦争責任問題」を突きつけられる敗戦直後の時間が最後の一章としてとってつけられたようになってはいるが、既に触れたように前後には内容・時間的な転調が見られる他、物語の前半は饒舌に、残り一章は舌足らずに語られるという文体の鋭角の変容の問題を抱え、作品構成というフォルムの上でもかなりの不均衡さが屹立している。このように「虚偽」における様々な二重性は、年枝を呪縛している関係構造の総体として、相互連関しつつ重層的に立ち現れてくる仕掛けになっているのだ。

「虚偽」は、慰問団の乗った船が、目的地であるシンガポールへ無事着いた場面から語り始められる。しかし語り手は、視点人物である年枝の「ほっとした気持ち」より、死への恐怖と死をも恐れぬ不敵さを併せ持つという、彼女に沈潜するアンビバレンツな暗さに目を向けている。更にその不敵さは、「その根に思想をおいておらず、いわばばくち打ちの度胸に似たものであったろうか」と、この「思想」という言葉がどの程度の内容を示すのかは説明不足のため不明だが、あくまで敗戦後の視点からかなり自虐的に自己分析されていることが看取できる。語り

手は、「南方」に夢見てやっては来たが、傍目には「流れてゆく哀れさ」を纏わざるをえない料理人や、小唄の師匠といった庶民の姿を当時の風俗として冷静に描いている。そして年枝は、庶民に寄り添いつつ、しかし自虐的であることに唯一、時代に對して超然とした作家の自負を見い出さざるを得ない。彼女のニヒリスティックな暗さは、国に貢献するためにやって来たのと泣く若いタイプピストの、罪のない「素直さ」や「無邪気さ」が放射する明るさから逆に取りありと照射されている。同時にここには、そうした庶民の〈人情〉に親身に寄り添いつつも、〈知〉の部分での同化を拒む、年枝の深い孤独と、それと表裏一体に位置する庶民に對しての優位性が潜んでいると言えなくもない。

海に死体となって浮かぶ自分の無惨な姿を、常に思い描いてきたという年枝は、肉体的な死そのものを恐れているのではない。もし死んだら「彼女の心底を知らぬ人々が、止しアあいいのに、と、その程度に笑うにちがいない、と、そのことの方が彼女を鼻白ませた」のだと告白するように、彼女は、あくまで死によって生じる我が身の〈恥〉という形而上的な死を恐れているのだ。日本人の罪意識を西洋人のそれと比較した木村敏の卓見^{注23}に従えば、日本人である年枝の自己は、神との垂直的な関係性を持たず水平的に人と人との間に根拠を持ち、〈罪〉は〈恥〉として認識され、他者への告白により軽減されることはない。むしろ、今後ますます複雑な様相を呈してゆくであろうことが想像できる。また、年枝にとって「戦争協力」は文壇やジャーナリズムという内輪（とりわけ後半部で唐突に参入するかつてのプロレタリア文学運動の仲間たち）での〈恥〉として意識さ

れており、社会に対する公的な「罪」として認識されることとの距離がここに表出されてもいるだろう。

年枝は自己の存立に関わる「恥」を認識し、「戦争の本質」と終結の有り様を漠然と「知って」いたと主張する。そして語り手が主張する年枝の面従腹背システムの基底には、その目論見は敗戦後の今という時点から照射・相対化されることではじめて批判的に解釈されるのだという訴えが存在する。それ故、敗戦後の客観的考察が回想場面にも時折挿入され、語り手の年枝への批判が適宜語られることにもなっている。それは、当時はあくまで「虚偽」の意識を保持していたのだという語り手の主張を補完する役割を果たすのである。

例えば「南方」回想場面の最後の方で、「シャンタルという公園のような町」にある、「マニラ麻に似た繊維になるサイザル」の広大な農園の光景がかなりの分量で描かれる。そこで、所長をサポートして農園を管理するある知的な青年と年枝とのやりとりが、年枝のみならず「虚偽」執筆時の作者の位相を強調しようとい意図されていることは誰の目から見ても明らかである。年枝は、自己の矛盾に思いを巡らす青年に、「いわばこの戦争そのものが盗み」なのだと言ひ、青年からも「資本主義の矛盾と凶暴の中に、僕たちははまり込んでいる」のだといった体制批判的言説を巧妙に引き出している。ここでの青年の言葉つきが、被植民地の人々の立場を欠いた、日本が悪いのではなく、資本主義が悪いというニュアンスでの、本質からそらされた見方であったとはいえず、当時の軍国主義一辺倒の状況下での言動であることを考慮すれば、これはかなりの批判精神として評価でき

る。また、このような語り手の眼差しは、最終章の戦後の時間における年枝の自己分析・自己批判へと直結してゆくこととなる。そしてその要は、やはり年枝は虚偽を自覚していたのだという、その一点を支柱にしているのだ。そこにこそ、年枝なりの自負があるのだから。

しかし彼女が偽装であることを自覚しようがしまいが、仲間たちはそれぞれ自分を云々しているわけではなかった。例えば終盤明らかに宮本百合子と推察されるMが糾弾したように、戦地へ慰問した行為そのものが誤謬であったことを追求したのである。そこで年枝は、皆も事情を「知っていた」のではなかったのかと身内の冷たさに反発することになる。また、「一七年間の牢獄」生活から解放されたNが身に纏う「非転向」というものの胡散臭さや、更に年枝を裁く側の立場的曖昧さといった批判を行間に漂わせつつも、外側から見た時の否定しがたい自身の誤謬をやはり認識せざるをえなかったという点が焦点化されている。

そして、年枝の「虚偽」という自己完結的な物語は、「心の中で虚偽だけが、ふわり、と浮」き、続けて「中支那で、南方で、さらしてきた虚体だけが、ふわりと浮いた」とあるように、彼女の志に背理して予想もしなかった悲劇的結末を予め内包していたのだと言ひ手は断罪する。

ここで提出される年枝の正直な、そしてあまりにも切ない煩悶は、詳細な説明や周辺事情についての情報欠損によって余裕のない切迫感を一層引き立てはするが、^{注25}当然の成り行きとして作者の読者へのもたれかかりと、作品完成上の問題を招来してしまう。ここでは、年枝の自他共に向けた孤独な問いかけに明

確な答えが与えられることはなく、ある意味当初余裕をもって語り始められた「虚偽」の世界は、舌足らずに、そして佐多独自の感覚的擬態語の多様（例えば擬態語で証言された難解な事柄が、更に擬態語で説明されるといった方法）^{注26}による行間への書き込みという語り方によって、半ば唐突に閉じられている。そしてそこでは、読者の当惑と同情と疑問などの様々な思いが置き去りにされてしまうということをもつて、だからこそむしろ我々は、真相を読み取ろうとする自然な発想によって、この作品終了地点から冒頭の回想場面へと立ち戻らなくてはならない。こうして循環する読みの形式を読者に強いる力が、この作品には存在しているのだ。

3

さてここで、年枝の苦しい自己和解の装置を採用して描かれてゆく、「南方」の異国情緒溢れる回想記の道筋を、我々はもう一度なぞつてゆかねばならない。すると「虚偽」には、二重性を内包した〈風景〉と二重性を強いられた年枝の〈身体〉が密接に絡み合った物語が存在していることに気づかされる。まずは、当初年枝が対峙した「マレー・ジャバ・スマトラなどの一帯」の相貌を、次の象徴的な一章に見てみよう。

正面からの戦いは一応切れて、シンガポールの町には、まっ赤な花をつけた街路樹の下を、朱塗りに金具で模様を打った人力車が日本人を乗せて走っていった。街一面が海に向かったここでは、明るい

日をいっぱい浴びて、かりっと焼けながら海からの風で空気を変えていた。

日本とは異質な底抜けに明るい日射しの中で、花も樹も混ざり気のない原色の美しさで輝く、開放的な「南方色」の〈風景〉が、外見上は「身軽」になった（この表現は、「道」にも見られる）年枝ののびやかな視点によって描かれている。少し前まで英国領であったこの地域は、「西洋と東洋との文化で混成された」空間と化しており、今やそこに日本の文化も侵入して、異文化が会う時に生成される独特な猥雑さと面白さが充滿している。また、「シンガポールは一応戦いが終わり、軍政がしかれて、軍人と官吏の間には、家族を呼ぶべきや否や、という問題も提起されるような時期であった。」とあるように、この慰問は、年枝が少し前に行った「中支那」の「陣地の塹壕」における命がけの体験に比すれば、かなり気楽な「南方見物」でしかなかったと語られる。^{注27}日本の統治下にある「南方」には、虚構であるにせよ本土には存在しない「自由」が漂い、軍から派遣された年枝が当然のことながらかなり優遇され、身の回りは十分に保証されている様子がどの場面からも看取できる。また現地の人々の彼女への接し方も、自ずと礼節を重んじたものになっていることがわかる。

このような年枝の前に、前述の「南方色」は、町並み・文化・風俗・習慣、そしてそこで暮らす人々までをも呑み込んだ、一つの大きな躍動的〈風景〉として魅惑的な風貌で現出するのである。その中で繰り広げられる、現地の人々と侵入者である自

分も含めた明らかに異質な「点景」としての日本人の日常は、明暗のイメージの描き分けにより対照的に提示されることになる。まず日本人についての記述を見てみよう。

歩いている日本人の男たちの半袖と半ズボンの姿は、港町を見物している田舎者のどこかうろろうしたものを連想させた。(中略)安物屋としかおもえぬ店の飾窓に顔をすり寄せているのを見ると、同胞への悲しみを彼女は感じたが、そういう年枝たちの姿も、この街では何か目立ち、目立つということではそれは女の姿のうす汚さになるものであった。

きらきらとした陽光の輝きは、虚構の「自由」に翻弄される日本人のある哀れさとうすぎたなさとを際立たせ、「南方色」は日本人と対立的な自然として存在していることがわかる。日本人は、いわば「点景」として配されつつも、本質においてそこから疎外されていると言えるのだ。

一方侵略された現地の人々はと言うと、それとは対照的に「南方色」に溶け込む形でたくましく健気に生きる姿が活写される。例えば、土方仕事に従事する「中国人の婦人労働者」の姿は、次のように描かれている。

如何にも一日の仕事を終えたというふうには、ゆったり歩いてくる。南の夕陽はどこか憂愁をふくんで大きな幅を持ち、二階建ての木造家屋の並んだこの通りを静かに照らしている。女たちは誰も口をきかず、しかし、疲れたという足どりでもない。揃って、南方の中国

人らしく大らかな顔立ちで、無表情に近かったが、それは太く落ちていて、まるで、この大きな夕陽の色調を人間の顔でしっかりと受けとめているというように見えた。人力車で来る日本の女など見上げようもしない。

被植民地の人々の悲惨さは言うまでもなからう。しかし、ここにおいて彼女らは語り手によって完全に美化されていると言えるだろう。黙々と日々の労働を受容する彼女達の表情は、鮮やかな「南方色」に彩られ、語り手は決してその虐げられた生活の内部と時代の真相に踏み込もうとはしない。こうした姿勢は他の場面にも散見できる。例えば、「一日一万人近くの中国人が何日か続けて殺されたという話」を挿入し、兄が行方不明だという一人の中国人娘を前にして現実的には何もできない年枝の自虐的な苛立ちを批判的にとらえながら、しかしそれ以上年枝の矛盾と娘の事情に立ち入ろうとはしない。ここには、明らかに「南方色」という「風景」による事実の意図的な粉飾が見られる。

この視点は、たとえそれが韜晦であったにせよ、日本の侵略という本質から目を背け、ただ現地の風俗・習慣の面白さを旅行記として書き留めた、佐多の南方慰問報告文「旅の日記」^{注28}での国内宣伝的な「風景」描写との差異を明らかにしないであろう。また、あくまで戦中の年枝の限定された視点によって描き出された「南方」の生命力に溢れた「風景」は、「南方」の国々自体と無自覚に同化され、その国の真の文化や主体が捨象された単なるモノと化してしまう危険を孕んでいる。^{注29}侵略戦争であ

ることを頭では充分承知しているはずの年枝の「身体」性は、戦跡での兵士の血の跡に度々泣くことで、徐々に主体を欠落させた「点景」として「南方」の「風景」に呑み込まれてしまう。その時の年枝の眼差しからは、被侵略国の人々の主体もまた次第にこぼれ落ちていくであろう。彼女が現地で出会った一人一人に寄せる個別的な同情や後ろめたさは、体系的で強固な思想へと発展してはゆかない。年枝は「その涙でもって、彼女の意識的な虚偽の皮を厚く」してゆき、次第に自己を「南方」の「風景」の中へと溶解・埋没させつつある。ここでの語り手の視点には、このような年枝のありのままの姿や視野の限界性が如実に提示されている。年枝とその周辺の内部にそれ以上踏み込まないという、こうした敗戦後の語り手の視点は、年枝の限界をそのまま語り手自身の限界として、はからずも作品内部から突きつけ糾弾する結果になっているのではないか。

さて「虚偽」というテキストにおいて、この抑圧者と被抑圧者という対照的な二つの「風景」の差異はいつの間にか曖昧となつてゆく。パダンのあるホテルでの会見で、現地の女性が日本語教育について異議を唱え、立場上年枝は本意ながらそれに反論せねばならないという場面がある。

(前略) またしても問い。「東亜共栄圏というならば、日本はスマトラに独立をさせていいのではないか」

「独立の時期ということがあるでしょう。今では危ない、と日本はおもっているのではないでしょうか」否! というように何人かの婦人は卓を叩いた。すると、年枝の心の中に、演技の真がのりうつ

り、彼女はほんとうに日本政府を代表しているような傲ぶった感情になった。

「もう、いいかげんでおしまいにしましょうよ」と、日本人にずけずけ言った。

ここでは明らかに、思いがけず虚偽が実へと移行してしまうその錯誤の瞬間を見事にとらえている。刹那的に「真から」虚偽をぬぐい去り、外と内とが一つに統合された年枝の身振りは、直後に彼女自身によって「鏡に映してみるように」見つめ返されはする。しかし、疲労とニヒリズムの中でそうした内省的行為はその場しのぎとして流され、終には露悪的な自己演出として自嘲の対象となってしまう。あるいは、大衆雑誌の編集長・Hとの論争で、この戦争が「聖戦」ではないこと、それが兵士を二重に苦しめる仕組みについて主張する年枝が、Hに嫉けられて「はじめた戦争なら勝たなきゃならないでしょう」と、「虚偽」を明確に言語化してしまう局面が描出される。当然信条的に戦争反対の立場を固持しながら、しかし戦地の健気な兵士たちの姿を目の当たりにした時、彼女にとってその答えが心情的には全くの「虚偽」でもないという複雑さが炙り出されている。この発言の直後、語り手は次のように書き記す。

年枝は、自分の虚偽を友人のいる前にぬけぬけと言葉にもした、という自分に対して屈辱を感じ、そして、Hに対する憎悪をふくめて胸のうちで、ええいっと、呻った。彼女の鼻の奥がこくと鳴った。

實際こうした苦い内的体験は、「戦地慰問」という特殊な状況下では先程のようにやりすごしてゆく他はなく、またそうでなくては「隠れ蓑」を着た「戦地慰問」など続行できようはずもなかったであろう。以上の二つの場面では、惑乱した自分を「見詰め返す」という作業によって、自己に強い面従腹背の意識をかりうじて保管し窮状をしのいだ。しかし「虚偽」の時間以降、これらに似通った精神的転倒の瞬間が断続的に訪れ、いつしか一つの精神的営為として連続してしまうであろう暗い未来が予見されるのだ。

シヤンタルの大農園の日本人所長は、「おもいがけなくこの戦争で、ぼう大な農園の所長になった」とあり、郷里の熊本弁で話す気のいい人間として描かれる。彼は虚構の豊かさを実体として享受し、正に日本帝国主義の恩恵に浴している。しかし彼の邪気のない明るさには、冒頭で語られた日本人特有のうすぎたなさはない。むしろ無知故に時代に翻弄される庶民の苦労や幸福に親しみが込められさえしており、ニヒリステイックな青年の言動によって彼の存在が相対化されるとはいえ、「南方」の広大な農園の〈風景〉と同化した彼の姿が生き生きと描かれている。またこのサイザル農園の〈風景〉は、年枝の微妙な心持に感応するかのように臨機応変にやわらかく変容する。例えば「南方」の風俗・自然に心が傾き、日本の窮屈なしがらみから解放される自在さに身をゆだね、ストイックな愉悦を漂わせる折には、それは日本の日常的〈風景〉とは異質の壮大な美として立ち現れる。しかし日本帝国主義の凶暴さへと彼女の意識が注がれる時、巨大な樹木はまるで生きもののごとく感知せられ、

「夢のような花の色まで、幽霊の軽い裾をおもい出させた」と、〈風景〉はその「不気味」な風貌で彼女の周りを囲むのである。こうして年枝の言語化しがたい複雑な心象は「南方」の〈風景〉が寛容に引き受け、彼女は「南方」の〈風景〉の中に身をよこたえようとしている。

このように偽装意識と自発的行為との間に次第にズレが生じてゆく過程で、年枝のとらえた〈風景〉の二重性はいつしか一つの方向へ統御される。引き裂かれた〈身体〉感覚もそこに収斂されることで、年枝の精神の安定が保証されることになる。いわば「南方」の〈風景〉に埋没する〈身体性〉によって面従腹背システムから逸脱し、「虚偽」の時間以降「隠れ蓑」が本来の機能を完全に喪失してしまうであろうことの、その重苦しい未来図を「虚偽」の世界は確かに透視させるのである。

むすび

あくまで腹背面従であったとする語り手の主張の一方で、しかし同時にそれを裏切りそこから滑り落ちるであろう端緒を明らかに描いて見せたという点において、「虚偽」は二律背反の面白さを含有している。また、当時出口のない「戦争責任」問題に風穴をあける可能性を示した、他に類のない作品として評価できるだろう。重い罪を背負った一人の作家があくまで自己の言い分の正当性にこだわりつつも、しかし脆弱な自己を挟り出そうと奮闘するという矛盾に満ちた言挙げの中で、いつしか自らの主張のほころびを明確に描き出すことに成功した。敗戦後

の佐多の再生の契機を、ここに認めることができるのだ。

しかし重要な問題点が残されているのも事実である。例えば、ここで年枝が認める自身の「誤謬」が、「戦地慰問」という実践行為のみに集中している点である。「天皇の御為」とだけは書くまい」「自分について」という一点にかけた当時の文章群についての詳細ないきさつは、小説世界から抜け落ちていく。これは、敗戦後の佐多に一貫した態度ではなかったろうか。多くの大衆に消費されることで、彼らの精神生活に影響を与えたとされる戦争協力的な文章の生産過程について、佐多は小説世界で明らかにすべきであったと思う。

「虚偽」以降も、「戦争責任」は一貫したテーマの一つとなつてはいるが、しかし、むしろ「戦争協力」という大きな挫折体験は、例えば一つには女性問題として、あるいは共産党という組織と文学・個人との関係性といった他の社会的問題へと変奏され深化していったのではないか。そういった意味で北川秋雄などの佐多の作品全般を総括した「戦争責任」問題の通史的な仕事を^{注30}見据えた上で、小説の言説に限って「戦争責任」問題を辿るといふ作業もまた今後必要になってくるはずである。

注1 後、「生きるということ」(文藝春秋新社1965年3月25日)に

所収。北川秋雄は、「戦後において日中戦争および太平洋戦争下での文学者の、戦争責任問題が議論された時期」を三期に分類しており、その説に従うとこのエッセイは第二期に含まれる。(総論 佐多稲子その光と影)『佐多稲子研究』双文社1993年10月23日)

注2 「虚偽」は、北川説の第一期に含まれる。2000年1月10日、新宿「松澄」での佐多稲子研究会による佐多の長男・窪川健造氏から

の聞き書きによると、この雑誌を発行していた目黒書店の社長・目黒謹一郎は、「大変文学のわかる人で」、当時の自宅を建てる資金を借してくれたということである。佐多が、「虚偽」の発表誌として『人間』を選んだことにも、この作品に対する佐多の意気込みが窺えるのではないか。

注3 「近代日本総合年表」(岩波書店1989年7月5日)・石子順造「軍旗からテレビへ 年表昭和庶民史」(『太陽』平凡社1975年7月号) 参照。

注4 1945年5月、窪川鶴次郎と正式に離婚。「虚偽」執筆時佐多は44歳。(『年譜』全集第十八巻 講談社1979年6月20日)

注5 1999年10月31日、飯田橋のシニアワーク東京で、佐多稲子没後一周年行事として婦人民主クラブと佐多稲子研究会共催の「佐多稲子氏を偲ぶ会」が開かれ、150人余りが参加した。これは、その時の講演「昭和二十年代の佐多稲子」による。

注6 「評論」1946年6月

注7 「芸術」1948年5月

注8 「光」1948年9月

注9 「太平洋戦争期の佐多稲子・2」(『佐多稲子論』オリジン出版センター1992年7月23日)

注10 学風書院1952年12月15日

注11 「新聞・雑誌記者・女流作家・南方派遣指導要領」(ここには、「九月十八日迄」二字品二集合シ九月二十日字品発昭南二向フ」とあり、メンバーの多少の異動と共にこれをいかに解するかは今後の研究に委ねられている。

注12 古くは、加納実紀代らの仕事などがあり、最も最近の例を紹介すると、2000年12月16日、大東文化大学人文科学研究所主催で大東文化会館にて開催されたシンポジウムと講演「文学史書き換えに向けて 戦時下の女性文学―女自らが問う戦争責任」で、様々な角度から女性の戦争責任が論議されたことなどが挙げられる。

注13 (9)の前掲書に同じ。

注14 青木書店1993年7月25日

注15 内海愛子・田辺寿夫編著『アジアからみた「大東亜共栄圏」』(梨の木舎1973年12月8日)・「特集・東亜建設の自給経済大系」(中

央公論』1941年秋季特大号) 参照。

注16 例えば、太平洋貿易研究所編の『南方共栄圏経済研究所』(大東書館1942年8月20日)には、南方諸国に包蔵される豊富な資源を速やかに開発し、それによって内地の衣食住全てにわたる欠乏を充足させること、更にその生産の仕組みを大東亜共栄圏内部における自給自足システムとして成立させることの重要性が説かれている。また、福井英一朗の『南方圏の気候』(東京堂1942年9月30日)といったガイド的書物には、「日本内地の真夏の状態が一年中或いは永久的に続いている」と、日本の気候と異なる陽光に満ちた南国の気候が詳細に分析されている。

注17 1999年8月31日の、佐多氏宅での佐多稲子研究会による窪川健造氏からの聞き書きによると、祖母タカの死亡日は4月4日と確認された。

注18 「凡例」(日本文学報国会編北光書房1944年)

注19 この点に関する最近の研究では、北川秋雄の「佐多稲子―南方派遣と『若き妻たち』のこと」(『南方微用作家―戦争と文学―』世界思想社1996年3月20日)がある。

注20 全集年譜によると、当時の佐多は、祖母タカをひきとり、夫・窪川鶴次郎と共に、長男・健造(12歳)と次女・達枝(10歳)の二人の子供を抱えていた。窪川は執筆が困難になっており、佐多の筆の力が家庭の経済を支えていたと考えられる。厳しい状況下の日本に幼い子らを残し、経済を担う母親が半年も家を空けるということは、相当に覚悟のいる決断であったろう。佐多が旅立った翌年の3月、健造と達枝がそれぞれ、スマトラ・メダンの毎日新聞社支局内の母に宛てて、茨城県潮来の旅行先から絵葉書を書いている。そこには近況報告と共に、母を恋うる心情が切々と記されていて胸を打つ。佐多が、それらを振り切って長期にわたり危険の潜む戦地へ赴いたという事実は、彼女の「戦地慰問」に対する決意・意志の堅さ、アグレッシブな行動力を物語る一つの証左となろう。(葉書の住所は「茨城県潮来出島あやめ旅館」、日付は「3月29日」とある。)

注21 (1の) 前掲書に同じ。

注22 近代文学会春季大会研究発表「『女の生活』への視点―戦時下佐多稲子文学の揺らぎ―」(2000年5月28日於大妻女子大学)

注23 「罪と罰」『精神病理的日本人論 人と人との間』(弘文堂1972年3月20日)

注24 ちなみに谷沢永一も「嘘ばかり」で七十年(講談社1994年11月15日)で、当時このような人物がまとう権威性への反発や「非転向」への懐疑を感じたことを述べている。

注25 小林裕子も、前半と後半の対照的な叙述について指摘している。「『虚偽』「泡沫の記録」―挫折と再起」『佐多稲子―体験と時間』翰林書房1997年5月20日)

注26 こうした文体の問題に関しては、拙稿「夏の菜―中野重治をおくる―」論―「屈折」/「驢馬」の時間/「癒し」―(佐多稲子研究会「くれない」追悼号1999年10月)で詳しく述べた。

注27 清水一継は、当時のペナンについて、「馬來警見(下)」(『昭南新聞』1943年2月21日)で、「(前略)従って町全体から受ける感じというものは、至極のんびりしたものであった。(中略)一体これが戦時下の町の様相であっていいものであろうか。」と述べる。ここでも、異空間としての「南方」の風貌が伝えられている。

注28 (18) に所収

注29 川村湊他著『戦争はどのように語られてきたか』(朝日新聞社1999年8月1日)における、作家の植民地体験についての成田龍一の言説からヒントを得た。

注30 (1) の前掲書の仕事に代表される。

*なお、「虚偽」よりの引用文章は、『佐多稲子全集』第四卷(講談社1978年3月20日)による。また、佐多氏の遺品中から佐多稲子研究会により発見された(11)(20)(27)の資料の使用については、窪川健造氏の御理解と御厚意によることをここに記し、深く感謝申し上げます。

(やざわ みさき・一九八八年卒)